

父親の育児不安に関する基礎的研究Ⅱ

—父親の育児困難感発生関連要因及び父親・母親の自由記述の比較検討—

愛育相談所 安藤朗子・川井 尚・武島春乃・庄司順一
研究企画・情報部 中村 敬
愛育病院心理福祉室 小玉夕香・堤 道子・塚越理恵・永井桃子
愛育幼稚園 酒井幸子
愛育ナーサリールーム 山川美恵子
東邦大学医学部附属大橋病院 鈴木眞弓
(株)保健同人社 加来華誉子
嘱託研究員 恒次欽也（愛知教育大学）・渡邊 寛・鈴木玲子（彩の子ネットワーク）
大藪 泰（早稲田大学）・馬岡清人（埼玉工業大学）
平岡雪雄（浦安市教育委員会）・島 智久（浦安市教育委員会）
伊藤嘉余子（埼玉大学）・山岡テイ（情報教育研究所）
木邨真美（大阪府衛生会附属診療所）・古賀浩子（市立豊中病院）
栗原佳代子（東京大学）

要 約

昨年度は、0歳から6歳の子どもをもつ父親に対して育児不安についての質問紙調査を実施した。その結果、育児困難感タイプⅠとⅡとされる父親の育児不安心性が認められたことを報告した。育児困難感タイプⅠは、育児への「自信のなさ・心配・困惑・父親としての不適格感」と名づけられる育児不安心性で、育児困難感タイプⅡは、子どもへの「ネガティブな感情・攻撃・衝動性」と名づけられる育児不安心性である。今年度は、これらの育児不安心性の発生関連要因を明らかにすることを主な目的として研究を行った。分析方法は、因子分析して得られた7つの因子のうち、育児困難感タイプⅠ（第5因子）と育児困難感タイプⅡ（第6因子）それぞれを従属変数とし、その他の6因子を独立変数として重回帰分析を行った。その結果、育児困難感タイプⅠとⅡは、相互に影響を与えあっていること、その他の影響する変数は、育児困難感タイプⅠとⅡに共通して「父親の不安・抑うつ状態」（第2因子）であることが明らかにされた。両者の相違点としては、育児困難感タイプⅠには、標準化係数は小さいものの「Difficult Baby」（第4因子）と「妻の不安・抑うつ状態」（第1因子）の影響が若干認められたことにある。これらの結果から、父親の育児不安の発生関連要因が母親とは異なることが予想されたが、今後母親の分析との比較検討が必要である。また、自由記述の分析を行った結果、父親は育児に関わる時間が十分にもてず、そのため子どもがなつかず、子どもとよい関係が作りにくいという現状やそのような社会状況に対する不満や問題点を指摘する回答が多数みられた。次年度には、母親との比較検討を行い、父親の育児不安心性を規定する要因をより明確にしたい。

キーワード：父親，母親，父親の育児不安，育児困難感

A Fundamental Study on Child-Rearing Anxiety of Father II - The factors related the feelings of difficulty with child-rearing by fathers, and the analysis of free answers written by fathers and mothers. -

Hisashi KAWAI, Akiko ANDO, Haruno TAKESHIMA, Junichi SHOJI, Takashi NAKAMURA, Yuka KODAMA, Michiko TUTUMI, Rie TUKAGOSHI, Momoko NAGAI, Sachiko SAKAI, Mieko YAMAKAWA, Mayumi SUZUKI, Kayoko KAKU, Kinya TUNETUGU, Yutaka WATANABE, Reiko SUZUKI, Yasushi OYABU, Kiyoto UMAOKA, Yukio HIRAOKA, Tomohisa SHIMA, Kayoko ITO, Tei YAMAOKA, Mami KIMURA, Hiroko KOGA, Kayoko KURIHARA

Abstract : In the last year, we reported that fathers have the feelings of difficulty with child-rearing, and found two types of the difficulties; Type I and II. Type I indicated the lack of confidence, anxiety, embarrassment, and disqualifying feelings as a father. Type II suggested negative, aggressive, and impulsive feelings toward child. The purpose of this year was to research the factors related the feelings of difficulty with child-rearing by fathers. Multiple regression analysis has been done where the dependent variables were the Type I (Factor 5) and II (Factor 6), and the independent variables were 6 factors that were extracted by factor analysis. The results suggested that Type I and II mutually influence each other, and another related factor was “feelings of anxiety or depressive state (Factor 2)” that also related to both Type I and II. The difference between Type I and II was found that “Difficult Baby (Factor 4)” and “Wife’s feelings of anxiety or depressive state (Factor 1)” slightly related to Type I only. These results indicated that the factors related the feelings of difficulty with child-rearing by fathers were different from mother’s. Accordingly, we have to compare father’s factors with mother’s ones in future research. As a results of analysis of free answers, many fathers said; 1) they don’t have enough time for their child, and accordingly it makes child difficult to attach his/her father, 2) they have complaints about child-rearing situation in the society. In the next year, we will examine the factors related the feelings of difficulty with child-rearing by fathers by comparing with mother’s ones, and clarify the factors that make fathers feel difficult with child-rearing.

Keywords : Father, Mother, Child-rearing anxiety of father, Feelings of difficulty with child-rearing

I. 研究目的

はじめに

私たちのチーム研究では、「母親の育児不安研究」^{1~8)}を行い、育児不安心性とその発生関連要因を明らかにし、乳幼児健診、育児相談等の臨床の場で母親の育児不安の軽減に寄与してきた。

次いで、心理臨床の観点から父親研究の必要性を認め、「父親・男性研究」^{9~14)}を行った。父親が母親と共に育児を行い、父親の役割を果たしていくことは、子どもや母親にとって、また父親自身にも利益があることを確認した。

これら一連のチーム研究を通して、父親が育児により関わっていくことは、上述のように利益がもたらされる一方、父親にも育児不安が生じることが想定された。そこで、本研究のテーマである父親の育児不安に関する基礎的研究を昨年度より立ちあげた。そして、第一報(研究I)¹⁵⁾においては、父親にも2つの育児不安心性が認められることを報告した。

本年度は、これらの育児不安心性がどのような要因によって発生するのか、即ち発生関連要因を明らかにすることを主な研究目的として研究を行った。さらに、父親の育児不安心性の特徴を捉えるために、質問紙の最後の自由記述欄における父親、母親の回答を比較検討し、その生きた声を基に質的分析を行った。

なお、昨年度の研究Iで得られた主たる研究知見は以下の通りである。

1. 単純集計から、父親は地域等の社会資源から孤立していること、子どもの発達についての理解や認識不足があることや子どもの性格や行動についての心配をもっていること、夫婦ともに心身状態がよくないことなどが指摘できた。
2. 各領域間の相関関係からは、領域I(育児)と領域IV(自分の心身状態)の間に高い相関がみられ、父親の育児不安が関与しているものと推測された。
3. 因子分析からは、
 - a) 第1因子「妻の不安・抑うつ状態」・第2因子「父親の不安・抑うつ状態」・第3因子「妻・母親・家庭機能の問題」・第4因子「Difficult Baby」・第5因子「育児困難感タイプI」(育児不安心性1)・第6因子「育児困難感タイプII」(育児不安心性2)・第7因子「自分自身の親子関係」の7つの因子が抽出された。(表3参照)
 - b) 第5因子「育児困難感タイプI」(育児不安心性1)と第6因子「育児困難感タイプII」(育児不安心性2)は、その構成項目から育児不安心性を示すものと考えられた。第5因子「育児困難感タイプI」は、その構成項目から育児への「自信のなさ・心配・困惑・父親としての不適格感」、第6因子「育児困難感タイプII」は子どもへの「ネガティブな感情・攻撃・衝動性」と名づけられる育児不安心性が認められた。

なお、因子分析は1回目に抽出した項目群で再分析を行ったがほぼ同内容であり、内的整合性、因子間の関係もともに認められた。

注目すべき知見は、この育児不安の基本構造は、われわれが報告してきた母親の育児不安とほぼ同じであること、さらに、育児不安心性2にみられるように父親の育児不安そのものが虐待へのハイリスク要因であると考えられたことである。父親と母親の育児不安の基本構造が同一であることは、親という基盤によるものと考えられるが、今後、今回の父親版と併せて収集した母親版の分析を通して確認したい。その比較検討から父親独自の育児不安心性を見出すことができるかが今後の研究課題といえる。

II. 研究方法

1. 調査方法

研究Iですでに報告したが、父親と母親の育児不安とその発生関連要因についての項目からなる質問紙を作成し、調査を実施した。項目の作成については、次項に述べる。質問紙は、父親版と母親版を作成した。父親版と母親版の両方を作成した理由は目的でも述べたが、夫婦に実施することにより両親(夫婦)間の比較検討ができること、及びそれぞれの育児不安心性とその発生関連要因の分析が可能になると考えられる。

2. 質問紙の作成

「母親の育児不安研究」を通して、日本子ども家庭総合研究所・愛育相談所編著 母親用育児不安評定尺度「子ども総研式・育児支援質問紙」(0~11ヶ月、1歳児用、2歳児用、3~6歳児用)を作成し、頒布している。ここで用いられた項目を中心に、さらに、これまでの「父親・男性研究」で使用したSCT項目、そしてそれへの回答を参考にして、質問項目を作成した。(質問票は本研究I(川井ほか、P284-290, 2008)を参照のこと)

この質問紙は、領域I:育児に関する22項目、領域II:妻に関する18項目、領域III:家族に関する15項目、領域IV:父親自身の心身状態に関する28項目、領域V:妻の心身状態に関する25項目、領域VI:乳児期に関する8項目、領域VII:①0歳児の心身状態に関する12項目、②1歳児の心身状態に関する16項目、③2歳児の心身状態に関する21項目、④3から6歳児の心身状態に関する25項目、から成る。

3. 調査対象者とその属性

対象地域は、東京都、埼玉県、大阪府、京都府などである。配布は乳幼児健診、保育園、幼稚園、子育てサークルなどを中心にその他、われわれ研究メンバーの関係施設等から回収した。夫婦にはそれぞれ個別に回答するように求め、それぞれ別の封筒に緘封してそれをさらに

一つの封筒に入れて、施設を通して、または希望により郵送により回収した。なお、分析は両親のデータがそろっているものを主たる資料とした。配布数は3845件、内両親のペアがそろっているもの1936件(回収率50.4%)であった。有効回答数には含めていないがそれほど多くない単親家庭データがあり、有用な情報が得られることが期待できるので、別途、次年度以降に分析する予定である。

4. 分析方法

1) 重回帰分析

従属変数として、1. 第5因子「育児困難感タイプⅠ」、2. 第6因子「育児困難感タイプⅡ」をそれぞれとりあげ、独立(説明)変数としてはそれぞれ残りの6因子である。手法は変数増減法である。

なお、昨年度の因子分析の結果得られた因子に基づき分析するものであり、父親版のみの分析である。(各因子を構成する項目は表3を参照)

2) 自由記述の分析

質問紙の最後の自由記述欄(最後に子育てや家庭のことなど、父(母)親として、男(女)として、夫(妻)として日頃、思うこと、感じること、悩むことなどがあればご自由にお書きください)の内容から、これまでの質問の集約としてどのようなことが書かれているかの内容の分析をとおして、父親、母親の比較等を行った。

父親版、母親版の両方が分析の対象となるが、回答があったもののみを抽出して回答の特徴を読みとることとした。(表4にペアで回答があったものの中からごく一部を無作為に回答例として掲載した。)

5. 倫理的配慮

本調査の実施に当たり、各地域の小児科、幼稚園、保育所、子育てグループの責任者、及び調査対象である父親、母親に対し本研究の目的、研究方法の他、無記名回答であること、回答拒否が自由であること、個人情報保護のための配慮がなされること、回答をもって本研究に同意したことになること、本研究の目的以外にデータを使用しないことなどを依頼文書及び質問調査票に明記した。

また、研究計画の段階で、日本子ども家庭総合研究所・研究倫理委員会に審査を求め承認を得た。

Ⅲ. 結果及び考察

1. 育児困難感に影響する要因-重回帰分析

育児困難感(タイプⅠとⅡそれぞれ)を従属変数とし、他の6つの因子を独立変数として、どういう因子がより困難感に影響を与えているかを重回帰分析により検討した。

1) 育児困難感タイプⅠ

育児困難感タイプⅠを従属変数とした場合(表1)

モデル5の場合(調整済み $r^2=0.460$)、標準化係数(ベータ)から第6因子「育児困難感タイプⅡ」(.360)がもっとも大きく、ついで、第2因子「父親の不安・抑うつ状態」(.286)であった。さらに、影響はかなり小さいが第3因子「妻・母性・家庭機能の問題」(0.097)、第4因子「Difficult Baby」(0.093)、第1因子「妻の不安・抑うつ状態」(0.074)であった。

2) 育児困難感タイプⅡ

育児困難感タイプⅡを従属変数とした場合(表2)

モデル3の場合(調整済み $r^2=0.349$)、標準化係数(ベータ)から第5因子「育児困難感タイプⅠ」(.442)がもっとも大きく、ついで第2因子「父親の不安・抑うつ状態」(.168)であった。さらに、影響はかなり小さいが第3因子「妻・母性・家庭機能の問題」(0.070)であった。

育児困難感タイプⅠ、Ⅱはその心性は異にしているにもかかわらず深く結び付いてそれぞれに相互に影響を与えていると思われる。

そのほかの影響する変数は、タイプⅠとⅡに共通して第2因子「父親の不安・抑うつ状態」であり、この点は注目に値する。第5因子「育児困難感タイプⅠ」は、その構成項目から育児への「自信のなさ・心配・困惑・父親としての不適格感」を、第6因子「育児困難感タイプⅡ」は子どもへの「ネガティブな感情・攻撃・衝動性」を示しているものであるが、父親の精神状態の問題との関連から生じている可能性を示唆し、父親の育児不安の特徴の一面を示したものと考えられる。父親が育児に対して困難感をもつ場合、その支援の中心に「父親の不安・抑うつ」という精神状態への着目や対応が重要であることを示唆している。

育児困難感タイプⅠには、タイプⅡと共通してみられた第3因子「妻・母性・家庭機能の問題」に加えて、標準化係数は小さいものの第4因子「Difficult Baby」と第1因子「妻の不安・抑うつ状態」の影響性がみとめられた。このことは、育児困難感タイプⅠとタイプⅡの性質の違いを示すものとして捉えられ、この点も今後さらに検討を加えたい。

また、母親の育児不安研究では、子どもの年齢が0歳の場合には、育児困難感タイプⅠのみがみられ、1歳、2歳、3~6歳の場合にタイプⅠとⅡがみられた。父親にも子どもの年齢による違いが認められるかどうかについても今後の検討課題である。

2. 質問紙の自由記述の分析から

アンケートや質問紙などでは最後に自由記述欄を設けることが多く、本研究の質問紙も同様に自由記述を求めた。そして、多くはこの部分の分析はおざなりにされていることが一般的である。それは、数量化しにくいこと、

まとめるのに多大な時間や労力を要することにある。われわれはSCT法を用いた父親研究において、質的な解析のために、すべての回答を入力し、分析した経験を有することから、その生きた声の質的分析を行った。

回答率をみると、父親は19.5%、5分の1弱に回答があり予想外に多かった。母親は11.6%にとどまったことを考えれば、父親たちの意識の高さによるところと考える。過去の経験に照らして母親よりも父親の方の回答率が高かったことも珍しいことである。以下のまとめでは、回答の頻度の多寡ではなく、また、表4の回答例示にこだわらず、重要と思われる回答について述べる。

1) 父親版

- ・育児に関わりたいが時間がない。そのため、妻に負担をかけている。
- ・子どもが(あまり)なつかない。
- ・子育ては妻に任せきりになっている。(→申し訳ないと思う。できるだけ協力したい。等々)
- ・妻はよくやってくれている。
- ・アンケートへの意見として、父親や母親、夫や妻といった従来の役割観からの調査への疑義が寄せられた。

育児に関わりたいが時間がないので妻に負担をかけている、など父親として家族、とりわけ妻に向けられたものが多い。子どもに関しては、自分との関係のあり方、また、今の社会が子どもにとってどうかという社会的な視点からの意見、さらに、仕事との関係からみた家族との関わりの問題、そして父親としての自分自身のありようといったことが主な回答であった。

2) 母親版

父親と同様な意見が母親からも数多く寄せられている。

- ・母親にだけ育児支援をしても夫が育児に参加できなければ妻の負担が増えるので、父親が育児に関われるよう行政、会社等に考えてもらいたい。
- ・経済的な余裕があれば、子どもをもっともちたい。
- ・こんな私が子育てをしていいのだろうか(子育てへの自信のなさ)。
- ・子どもに対してイライラしてしまうことがある。
- ・夫が女としてみてくれない。
- ・子育てで忙しく夫のことがあまりできない。
- ・しつけについて、どう対応したらいいか悩む。

母親はその多くが家族との関係、とりわけ、夫との関係、その役割、夫と子どもとの関係など、自分と子どもなど家族の視点からの意見が多い。さらに、子育てをするという点からの社会への要望、女としての自己のありよう、時間のなさから自分が解放されたいといった自己を中心に視点を据えた回答が得られた。

3) 両者の共通点

- ・育児に参加したくても仕事が遅くまであり子どもにかかわれない。父親がかかわれるように、社会の体制がかかわればいいが。職場の理解がほしい。
- ・男性も育児休暇がとれる環境になってほしい。それが

当たり前の社会になってほしい。

- ・男(女)として、父親(母親)として、夫(妻)として、ではなく人として、人間として考えたい。また、そういう質問の仕方についての疑問や反論。
- ・経済的な不安(かなり多い意見)
- ・社会状況に対する不安、将来への不安
- ・子どもが手のかかる小さい頃まで(幼児期)は、父親も育児ができるように、残業などのないようによき来らよい。
- ・夫婦生活がない。
- ・育児に対する意見が合わない。

夫婦におもに共通するのは現在の社会、とりわけ育児を支援する仕組み、それと関連する職場の問題、経済的なことなどであり、社会の状況に影響された視点が多いといえる。

夫婦の相違は、1) 2) でも述べたように、妻は自己を視点の中心に据えていることが多く、夫は自己を含めた社会的な視点を中心におく傾向がある。また、夫婦ペアで見ていくと視点の違いはともあれ、家族のあり方の評価が異なる点にある。つまり、ポジティブに見ている夫と、ネガティブに見ている妻というペアが比較的にみられた。今後、これらの自由記述と質問項目との関係を検討したい。

3. まとめ

1) 育児困難感(タイプIとIIそれぞれ)を従属変数とし、他の6つの因子を独立変数として、いかなる因子が育児困難感に影響を与えているかを重回帰分析により分析した。

その結果、育児困難感タイプI、IIそれぞれは相互に影響を与えあっており、その他の影響する変数はタイプIとIIに共通して第2因子「父親の不安・抑うつ状態」であった。両者の相違点としては、育児困難感タイプIには、標準化係数は小さいものの第4因子「Difficult Baby」と第1因子「妻の不安・抑うつ状態」の影響が若干認められたことにある。

この結果から父親の育児不安の発生関連要因が母親とは異なることが予想され、今後の母親の分析などとの比較検討が必要である。

2) 自由記述の分析からは、

父親は、育児に関わる時間が十分にもてず、そのため子どもがなつかず、子どもとよい関係が作りにくいという現状やそのような社会状況に対する不満や問題点を指摘する回答が多数みられた。

これらのことを踏まえて、母親とともに父親も育児に関わるのが推奨される今日においては、単に育児参加を呼びかけるのではなく、次の点に対する対応や課題が明らかにされた。

- ①父親の育児不安の軽減
- ②そのためには父親の抑うつなどの心身状態への対応の必要性
- ③子どもの発達についての理解や認識不足があること、子どもの性格や行動についての心配を有していることに対して、父親が育児相談の場に積極的に参加し易くするとともにその啓発活動の必要性
- ④父親向けの子育てに関する地域資源のあり方やその活用の仕方についての検討

次年度には、父親の育児不安心性を規定する要因をより明確にしたい。さらに、次年度以降、母親版の因子分析等を行い、次々年度以降の完成版の作成を目指したい。

謝辞 本研究をすすめるに当たりご協力いただいた各地域の小児科、保育園、幼稚園の先生方、子育てサークルのリーダーの方々、そして、お父さん、お母さんたちに深く謝意を表したい。

注記：日本子ども家庭総合研究所・愛育相談所編著 母親用育児不安評定尺度「子ども総研式・育児支援質問紙」(0~11ヶ月、1歳児用、2歳児用、3~6歳児用)、2001 ©) は、日本子ども家庭総合研究所・愛育相談所に著作権があります。許可なく市販等に利用したりすることはできません。なお、本質問紙は頒布しておりますので、次のところへ問い合わせください。(株)母子保健事業団 〒101-8983 東京都千代田区外神田 2-18-7
TEL: 03-4334-1188, FAX: 03-4334-1181

文献：

- 1) 川井尚・庄司順一・千賀悠子・加藤博仁・中野恵美子・恒次欽也：育児不安に関する臨床的研究Ⅰ—幼児の母親を対象に—。日本総合愛育研究所紀要, 31集, 27-42p, 1995.
- 2) 川井尚・庄司順一・千賀悠子・加藤博仁・中野恵美子・恒次欽也：育児不安に関する臨床的研究Ⅱ—育児不安の本態としての育児困難感について—。日本総合愛育研究所紀要, 32集, 29-47p, 1996.
- 3) 川井尚・庄司順一・千賀悠子・加藤博仁・中村敬・恒次欽也：育児不安に関する臨床的研究Ⅲ—育児困難感のアセスメント作成の試み—。日本総合愛育研究所紀要, 33集, 35-56p, 1997.
- 4) 川井尚・庄司順一・千賀悠子・加藤博仁・中村敬・谷口和加子・恒次欽也・安藤朗子：育児不安に関する臨床的研究Ⅳ—育児困難感のプロフィール評定試案—。日本子ども家庭総合研究所紀要(旧誌名日本愛育総合研究所紀要), 34集, 93-111, 1998.
- 5) 川井尚・庄司順一・千賀悠子・加藤博仁・中村敬・谷口和加子・恒次欽也・安藤朗子：育児不安に関する臨床的研究Ⅴ—育児困難感のプロフィール評定質問紙の作成—。日本子ども家庭総合研究所紀要, 35集, 109-143, 1999.
- 6) 川井尚・庄司順一・千賀悠子・加藤博仁・中村敬・谷口和加子・恒次欽也・安藤朗子：育児不安に関する臨床的研究Ⅵ—育児困難感のプロフィール評定試案—。日本子ども家庭総合研究所紀要, 36集, 109-143p, 2000.
- 7) 川井尚・庄司順一・千賀悠子・加藤博仁・安藤朗子・中村敬・谷口和加子・佐藤紀子・恒次欽也：育児不安に関する臨床的研究Ⅶ—子ども総研・育児支援質問紙(ミレニアム版)の手引きの作成—。日本子ども家庭総合研究所紀要, 37集, 159-180p, 2001.
- 8) 日本子ども家庭総合研究所・愛育相談所編著 母親用育児不安評定尺度「子ども総研式・育児支援質問紙」(0~11ヶ月、1歳児用、2歳児用、3~6歳児用)、「子ども総研式・育児支援質問紙の利用手引き」、2002
- 9) 川井尚ほか：父親・男性研究Ⅰ—父親用文章完成法(F・SCT)の作成—。日本子ども家庭総合研究所紀要, 第38集, 203-215, 2002.
- 10) 川井尚ほか：父親・男性研究Ⅱ—両親の回答比較から—。日本子ども家庭総合研究所紀要, 第39集, 237-251, 2003.
- 11) 川井尚ほか：父親・男性研究Ⅲ—F・SCT(父親用文章完成法)による検討—。日本子ども家庭総合研究所紀要, 第40集, 165-187, 2004.
- 12) 川井尚ほか：父親・男性研究Ⅳ—M・SCT(母親用文章完成法)による検討 F・SCT(父親用)との比較を含めて—。日本子ども家庭総合研究所紀要, 第41集, 175-201, 2005.
- 13) 川井尚ほか：父親・男性研究Ⅴ—父親の役割に関する基礎的研究—母親の役割とも比較して—。日本子ども家庭総合研究所紀要, 第42集, 177-194, 2006.
- 14) 川井尚ほか：父親・男性研究Ⅵ—父親・夫・男性の基本的役割と今後の父親育児不安研究に向けて—。日本子ども家庭総合研究所紀要, 第43集, 203-242, 2007.
- 15) 川井尚・安藤朗子・武島春乃・永井桃子・庄司順一他：父親の育児不安に関する基礎的研究Ⅰ—今後の父親育児不安尺度作成に向けての予備的分析—日本子ども家庭総合研究所紀要, 第44集, 257-290, 2008
- 16) 川井尚ほか 育児における父親の役割Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ 厚生省心身障害研究「高齢化社会を迎えるに当たっての母子保健事業策定に関する研究」(平山宗宏主任研究者)平成元年, 2年, 3年度報告書, 1990-1992.
- 17) 川井尚ほか 育児における父親の役割と保健指導に関する研究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ 厚生省心身障害研究「少子化時代に対応した母子保健事業に関する研究」(日暮 眞主任研究者)平成4年, 5年, 6年度報告書, 1993-1995.
- 18) 川井尚・庄司順一・千賀悠子・加藤博仁・中野恵美子・恒次欽也：育児不安に関する基礎的検討。日本総合愛育研究所紀要, 30集, 27-39p, 1994.
- 19) 川井尚：育児における父親の役割, 小児保健研究, 1992;51(6):671-680
- 20) 川井尚：父親面接。心と体の健診ガイド—幼児編—。日本小児科学会・日本小児保健協会・日本小児科医会編。日本小児医事出版社。57-60。2000
- 21) 恒次欽也・庄司順一・川井尚：いわゆる育児不安に関する調査研究(1)—「育児困難感」の規定要因に関する研究—。愛知教育大学研究報告 第48輯(教育科学), 123-129, 1999.
- 22) 恒次欽也・庄司順一・川井尚：いわゆる育児不安に関する調査研究(2)—新資料による「育児困難感」の規定要因に関する研究—。愛知教育大学研究報告 第49輯(教育科学), 123-129, 2000.
- 23) 二木武監訳 ボウルビィ 母と子のアタッチメント 心の安全基地, 医歯薬出版株式会社, 1993
- 24) 厚生労働省 子ども・子育て応援プラン, 2005

表1 重回帰分析 従属変数(第5因子 育児困難感タイプI)の場合

モデル集計(f)

モデル	R	R2 乗	調整済み R2 乗	推定値の標準誤差
1	.566(a)	.320	.320	3.75929
2	.661(b)	.437	.436	3.42240
3	.671(c)	.450	.449	3.38350
4	.678(d)	.459	.458	3.35617
5	.680(e)	.462	.460	3.34814

- a 予測値: (定数)、第6因子2回目「育児困難感タイプII」(6項目)-1項目。
- b 予測値: (定数)、第6因子2回目「育児困難感タイプII」(6項目)-1項目, 第2因子2回目「父親の不安・抑うつ状態」(23項目)+1項目。
- c 予測値: (定数)、第6因子2回目「育児困難感タイプII」(6項目)-1項目, 第2因子2回目「父親の不安・抑うつ状態」(23項目)+1項目, 第3因子2回目「妻・母親・家庭機能の問題」(19項目)±2同一。
- d 予測値: (定数)、第6因子2回目「育児困難感タイプII」(6項目)-1項目, 第2因子2回目「父親の不安・抑うつ状態」(23項目)+1項目, 第3因子2回目「妻・母親・家庭機能の問題」(19項目)±2同一, 第4因子2回目「Difficult Baby」(8項目)同一。
- e 予測値: (定数)、第6因子2回目「育児困難感タイプII」(6項目)-1項目, 第2因子2回目「父親の不安・抑うつ状態」(23項目)+1項目, 第3因子2回目「妻・母親・家庭機能の問題」(19項目)±2同一, 第4因子2回目「Difficult Baby」(8項目)同一, 第1因子2回目「妻の不安・抑うつ状態」(25項目)同一。
- f 従属変数: 第5因子2回目「育児困難感タイプI」(7項目)同一

係数(a)

モデル		非標準化係数		標準化係数	t	有意確率
		B	標準誤差	ベータ		
5	(定数)	1.009	.360		2.800	.005
	第6因子2回目「育児困難感タイプII」(6項目)-1項目	.550	.031	.360	17.622	.000
	第2因子2回目「父親の不安・抑うつ状態」(23項目)+1項目	.097	.008	.286	12.288	.000
	第3因子2回目「妻・母親・家庭機能の問題」(19項目)±2同一	.051	.013	.097	3.947	.000
	第4因子2回目「Difficult Baby」(8項目)同一	.073	.015	.093	4.944	.000
	第1因子2回目「妻の不安・抑うつ状態」(25項目)同一	.024	.008	.074	3.005	.003

- a 従属変数: 第5因子2回目「育児困難感タイプI」(7項目)同一

表2 重回帰分析 従属変数（第6因子 育児困難感タイプⅡ）の場合
モデル集計(d)

モデル	R	R2 乗	調整済み R2 乗	推定値の 標準誤差
1	.566(a)	.320	.320	2.46261
2	.589(b)	.347	.346	2.41504
3	.592(c)	.350	.349	2.40949

- a 予測値: (定数)、第5因子2回目「育児困難感タイプⅠ」(7項目)同一。
- b 予測値: (定数)、第5因子2回目「育児困難感タイプⅠ」(7項目)同一、
第2因子2回目「父親の不安・抑うつ状態」(23項目)+1項目。
- c 予測値: (定数)、第5因子2回目「育児困難感タイプⅠ」(7項目)同一、
第2因子2回目「父親の不安・抑うつ状態」(23項目)+1項目、
第3因子2回目「妻・母親・家庭機能の問題」(19項目)±2同一。
- d 従属変数: 第6因子2回目「育児困難感タイプⅡ」(6項目)-1項目

係数(a)

モデル		非標準化係数		標準化係 数	t	有意確率
		B	標準誤差	ベータ		
3	(定数)	2.547	.229		11.099	.000
	第5因子2回目 「育児困難感タイプⅠ」(7項目)同 一	.289	.016	.442	18.189	.000
	第2因子2回目 「父親の不安・抑 うつ状態」(23項 目)+1項目	.037	.006	.168	6.549	.000
	第3因子2回目 「妻・母親・家庭機 能の問題」(19項 目)±2同一	.024	.008	.070	2.954	.003

- a 従属変数: 第6因子2回目「育児困難感タイプⅡ」(6項目)-1項目

注：各変数の2回目とは1回因子分析で抽出した後、その結果に基づき2回目の因子分析を行ったときの因子を意味する。
(+, ±, -, 同一は、1回目の因子と比べて項目の異同を示す。具体的には前年度報告書を参照)

表3 各因子を構成する項目

第1因子「妻の不安・抑うつ状態」	第2因子「父親の不安・抑うつ状態」
<ol style="list-style-type: none"> 1) 悲観的になりやすい 2) 精神的に不調である 3) 不安や恐怖感におそわれている 4) 沈みがち 5) 何ともいえず淋しい気持ちにおそわれることがあるようだ 6) とても心配性であれこれ気に病んでいる 7) 気が滅入っている 8) 何事にも敏感に感じすぎてしまう 9) 淋しそう 10) 精神的にゆとりがない 11) いてもたってもいられないほど落ち着かない 12) 体調の不良を訴えたり、病気がちである 13) 眠れないようだ 14) 疲れている 15) 妻は幸せな気分でも過ごしている 16) 妻は子どもをどのように扱ったらよいかわからない 17) 楽天的でよくよ考えない 18) 出産後、気持ちが沈み、おっくうで何もする気がなかった 19) 居場所がない 20) 家庭内に心配事がある 21) 生きいきしている 22) イライラしている 23) おこりっぽい 24) 仕事に行きたくない、仕事や家事をやる気を失っている 25) 仕事や家事がうまくいっていない 	<ol style="list-style-type: none"> 1) 沈みがち 2) 精神的に不調である 3) 悲観的になりやすい 4) 不安や恐怖感におそわれる 5) 気が滅入る 6) 何ともいえずさびしい気持ちにおそわれることがある 7) とても心配性であれこれ気に病む 8) いてもたってもいられないほど落ち着かない 9) 何事にも敏感に感じすぎてしまう 10) 精神的にゆとりがない 11) 淋しい 12) 仕事もうまくいってない 13) 眠れない 14) 居場所がない 15) 体調が不良であったり、病気がちである 16) 楽天的でよくよ考えない 17) 生きいきしている 18) 疲れている 19) 将来の見通しは明るい 20) 仕事に行きたくない、やる気を失っている 21) おこりっぽい 22) イライラしている 23) 家庭内に心配事がある
第3因子「妻・母親・家庭機能の問題」	第4因子「Difficult Baby」
<ol style="list-style-type: none"> 1) 妻は精神的に私を支えてくれる 2) 妻は私や子どものためによくしてくれる 3) この人と結婚して幸せである 4) 妻と気持ちが通じ合っている 5) 家庭内に関する事柄について妻には期待できない 6) 家庭の中がしっくりいかない 7) 妻は子育ての大変さなど私の苦労をわかっていない 8) 家族は私の趣味や仕事を理解し協力してくれる 9) 妻は育児のことで相談にのってくれる 10) 子育てのことで妻と意見が合わない 11) 家族としてのまとまりを感じる 12) たいていのことでは妻と考え方が合う 13) 母親としての自覚が足りない 14) 家庭には私の居場所がない 15) 家族の中で私だけがつらい思いをしている 16) 何かと家庭内にもめごとが起こる 17) 妻は子どもとよく遊び、面倒見がよい 18) 妻は幸せな気分でも過ごしている 19) 居場所がない 	<ol style="list-style-type: none"> 1) 夜泣きがひどい(ひどかった) 2) 一晩に何回も起される(起こされた) 3) 抱っこや外に連れ出すなどねむるまで手がかかる 4) よく泣いてなだめにくい(なだめにくかった) 5) わけもわからず泣く(泣いた) 6) あまり眠らない(眠らなかった) 7) おとなしく手がかからない(かからなかった) 8) 一日の生活リズムが一定しない(一定しなかった)
第5因子「育児困難感タイプⅠ」(育児不安心性Ⅰ) 育児への「自信のなさ・心配・困惑・父親としての不適格感」	第6因子「育児困難感タイプⅡ」(育児不安心性Ⅱ) 子どもへの「ネガティブな感情・攻撃・衝動性」
<ol style="list-style-type: none"> 1) 子どものことでどうしたらよいかわからない 2) 育児に自信が持てない 3) どのようにしつけたらよいかわからない 4) 子育てに困難を感じる 5) 父親として不適格と感じる 6) 育児についていろいろ心配ことがある 7) 子どもをうまく育てている 	<ol style="list-style-type: none"> 1) とめどなく叱ってしまう 2) 子どもは何で叱られているか分からないのに叱ってしまう 3) 子どもに八つ当たりしては反省して落ち込む 4) 子どものことを許せない 5) 子どもを虐待しているのではないかと思う 6) 子どもがわがままわがままとしてイライラする
第7因子「自分自身の親子関係」	
<ol style="list-style-type: none"> 1) 自分の親には大事に、大切に育てられたと思う 2) 子どもの頃、幸せに過ごしてきた 3) 自分の母親との関係は良好である(だった) 4) 自分の父親との関係は良好である(だった) 5) 子育てをするにあたって自分の親をモデルにしている 	

表 4 自由記述の例 抄録（ペアで回答があったものの一部）

ID	自由記述(夫)	自由記述(妻)
01010022	男女の性差がなくなるにつれ、家庭内での父親・母親像も変化してきており、十分には対応できていない自分を自覚することがある。このような状況下で育った子ども達が、将来どのような感受性を持った大人になっていくのか一抹の不安を覚える。	夫が仕事に没頭し、自分一人で子どもを育てている孤独感にいつも襲われている。相談すれば夫は答えてくれるが、もっと日々精神的な支えが欲しいと思っています。
01010025	異常な犯罪が昨今多くなり、不運だけな理由では済まされなくなった現代社会。家族をより安全に日々の生活を過ごせるよう守りたい、そういう環境をセットアップしたい。そこから、精神的にも支えて、家族をリードしたいと思っています。	子どもがもっと安心してらせる家庭にしていきたいです。
01010038	時間的・経済的余裕があれば、さらに家庭を援助できると思うが。	子どもが生まれてから、自分がすっかり母親になり、妻としての役割を意識しなくなってしまい、日々反省しているが、やはり日々の生活に追われていて優先順位は母親が1番になってしまいました。
01010064	仕事と家庭の両立で、苦勞しています。特に今は、夜へ朝にかけて勤務の事が多く、家族と接する時間が少なくなってしまうのが、とても残念です。	主人は仕事で1日に3時間（AM9:00～PM12:00）しか在宅できない日が、週3、4日あります。又、土・日も仕事となれば、何ごとであろうとも職場へ行かなければなりません。通勤族の為、3年に1度、知らない土地（国内）へと引っ越しがあります。子育ては必然と、私一人にかかってきます。近くに知り合いも、親族もいない為、その土地での生活を、私一人開拓していきます。もちろん環境が変わり、子どものストレスは、全て私が背負います。主人は、職場内に知人はいますが、やはり、通勤はストレスになるようで、私が夫のストレスも背負います。私は、誰にたよれることもなく、たえるしかなく、たえきれなくなった半年後、主人にぶつけると、「じゃあ仕事やめるよ!!」とギャク切れ!!私は3ヶ月に一度の点てきと病院の先生が、出してくれる薬がたよりです。Dr.と話す（話しあいてができる）ことが、とてもうれしい時間です。 昨年の夏、某相談所に話を聞いて頂きたく思っていたのですが、何だか、自分が甘えているだけなのではないかと、戸をたたくことができませんでした。この状況で3人目を身ごもり、おろす勇気がせず、やっつけいけないと思いつつ5ヶ月目に入っていました。涙が出そうです。
01010083	自由に伸び伸びと育てたいが、良い小学校に入学させるには、ある程度（不要とは思いますが）の勉強をさせたり、まだ早いと思いつつ水泳や、体操 etc をさせている事が…いかがな事かと常に思っています。小学校もいろいろ良い事はいつでも結局出来上がった子ども=もう伸びそうもない子ども?を入学させている様な気が…??	1人っ子ですので、何事もかげんがわからない子どもどおしのトラブルの際の母親どおしの関係がむずかしい (我が子を守ってあげたい気持ちと相手の手前と悩む)
01010088	私が、自分を磨き、仕事に自信を持ってやっている姿を子どもに見てもらえたらと思う。	男の子の双子で早生まれ、幼稚園でも問題児扱いされていて苦勞は絶えません。本当に可愛い子ども達ですが、赤ちゃん時代に育て上げるのが本当に困難でしたので、もう1度（育て方を知った上で）育て直してあげたいな—と思います。子どもらしく可愛いだけがとりえなのですが、いつになったら楽になるのかという5年間です。本当はもう1人子どもが欲しいですが、正直、私の性格でまたこんな子が育つという不幸があると思うと産んで赤ちゃんを育てる自信がありません。

01010090	日本はどのようなのだろう？	育児が周囲の環境で全く違い、小学校へ行く時に差がありすぎだと思う。田舎に引越した子が上級生からいじめられて、自殺しそうになったと言っていた。都会の子の方が純粋だと言っていた。親も同様に、東京の人に対する劣等感はひどいらしい。
01010103	子どもは、非常になつておりコミュニケーションは問題ないと思っているが、仕事が忙しく、一緒に過ごす時間が少なすぎる点が、自分としては心配しています。但し、子どもは平日は幼稚園で忙しく、あまり、不満を感じている様子はないのですが…。	子どもが持てて日々幸せに感じています。
01010107	なかなか平日に思うように家族と接する時間がとれず、子どもや妻に対してよくない影響を与えているのではないかと思うときがあります。休日を家族としてのまとまりを高めていくために如何に有効に過ごしていくかが当面の課題です。	子どもとは、一緒に楽しめる事を毎日探して日々過ごしています！子どもの事ばかりでなく主人とも共に楽しめる事をもっと見付けて行く事がこの先のテーマです。
01010108	妻のイライラが子どもに与える悪影響が心配。イライラしないうすむようにサポートしてやりたい	子育てで疲れていると、つい子どもを強く叱ってしまい、いつも反省。虐待しているとは思わないが、子どもにとって精神的にキツイだろうな…と思うほど叱ってしまう事がある。いつもすぐ反省し、本人にゴメンねおこりすぎたね…と言っているが、これは絶対に直さねば…と思っている。
01010117	多少、落ち着きがない。食が細い。	子どもだけが生きがいのなくなってしまい、子どもに期待をかけすぎ、受験のときは、子どもと私の精神状態がボロボロになってしまった。でも受験がいい結果で終わると、私も子どもも夫までがガラリと変わり、毎日楽しく、子どもも子どもらしく生活できるようになった。精神的にも家族皆が安定してきました。